第43回全国公民館研究集会・
令和３年度東北地区社会教育研究大会記念号

NO. 43

最上の社会教育

2021

最上地区生涯教育推進協議会
山形県教育庁最上教育事務所

■鼓動(こどう)■　表紙：樋口　勝也　氏

第４３集の発刊に当たって

令和３年度は、菅内閣から岸田内閣へ、一年遅れの東京オリンピック・パラリンピックの開催、そしてオミクロン株の爆発的な流行等色々な出来事がありました。

そのような中、令和３年１０月１４日に新庄市を会場にして「第４３回全国公民館研究集会・令和３年度東北地区社会教育研究大会・第６６回東北地区公民館大会(兼)第１２回山形県社会教育研究大会・第５９回最上地区生涯学習推進大会・第３８回山形県生涯学習振興最上大会」が開催されました。

新庄・最上地区で行われた生涯学習・社会教育関係の大会で東北大会規模のものとしては、平成１１年の「第４５回東北地区公民館大会」以来２２年ぶりでした。

当初、東北各地から約６００名の参加者をお招きし、１泊２日にわたって開催する予定でした。しかし、コロナ禍の中で一日行事に変更し、リモートで実施せざるを得なくなってしまいました。

そんな中、地元の偉人松田甚次郎氏を取り上げた「郷土からのメッセージとシンポジウム」は、地元の演劇関係者やコーディネーター・シンポジストの方々のご協力により感動的で質の高い内容となりました。新庄・最上の心意気を東北各地に発信することができました。

また、午後の第１～第５の分科会では、東北や県内各地の実践を元にしながらズームを通して研究協議を行いました。本大会はリモートで実施しましたので後日いろいろな分科会の内容もパソコンを通して見ることができます。それぞれが、すばらしい実践事例であり、各市町村で行うこれからの事業を企画するときに大いに役立つものと思います。

土地や風土さらには地域性や構成員等によって、各市町村や公民館等で行う社会教育事業や地域づくり等は千差万別であり、一概に他の成功例を持って来て同じように行うことには無理があります。地域の特性を見つめ直し、それぞれに合った事業を構築していくことが必要です。

いろいろな先進事例は、その時のヒントを与えてくれます。それに新しい材料やスパイスを加え、調理法を工夫し、新たなものを創って行くことが大事になります。

その時のヒントを、大会での発表事例や最上８市町村の実践を集めた本冊子の中から見つけ出してもらえれば幸いです。今回の「最上の社会教育第４３集」もその一つのきっかけになってくれることを祈っています。

最上地区生涯教育推進協議会長
齋　藤　　彰

目　　次

◇　第４３集の発刊にあたって

◇　最上管内市町村教育委員会・県神室少年自然の家　社会教育・社会体育実践例

＜新庄市＞　◇地域日本語教室スタートアッププログラムの実践 ～在住外国人支援の新たな仕組み～　・・・　１

◇新庄地区ジュニア長距離練習会について　・・・　３

＜金山町＞　◇公民館学習講座「歴史学講座」　・・・　５

◇31 地区モルック教室　・・・　７

＜最上町＞　◇放課後演奏ワークショップ ～ふるさとの木で奏でるやさしい音色～　・・・　９

◇高校生ボランティアサークル「つくし会」～コロナ禍だからこその活動～　・・・　１１

＜舟形町＞　◇縄文の女神と若鮎の里　ふながた　縄文の女神まつり「コロナ収束を願うお焚き上げ」　・・・　１３

＜真室川町＞　◇大人の社会科見学「真室川スタディツアー」　・・・　１５

◇スポーツ推進委員による町内散策イベント　・・・　１７

＜大蔵村＞　◇「おおくら雪山塾」　・・・　１９

◇オクトーバーラン＆ウォークへの参加　・・・　２１

＜鮭川村＞　◇前句付講座　～伝統的な文芸に触れる～　・・・　２３

◇鮭川村スポーツ少年団交流大会　・・・　２５

＜戸沢村＞　◇戸沢学園学校運営協議会の新たな取り組み　・・・　２７

◇絵本作家講演会　ようこそラーワーちひろワールドへ　・・・　２９

＜県神室少年自然の家＞

◇感動体験が大きなチカラを与えた「アドベンチャーキャンプ 2021」　・・・　３１

◇　最上地区生涯教育推進協議会事業関係等　・・・・・・・・・　３３

◇　表彰関係等　・・・・・・・・・　５１

◇　生涯学習・社会教育関係各種大会のあゆみ　・・・・・・・・・　５９

◇　実践事例集「最上の社会教育」歴代掲載内容一覧　・・・・・・・・・　６０

最上管内市町村教育委員会

山形県神室少年自然の家

社会教育・社会体育

実践事例

地域日本語教室スタートアッププログラムの実践　～在住外国人支援の新たな仕組み～

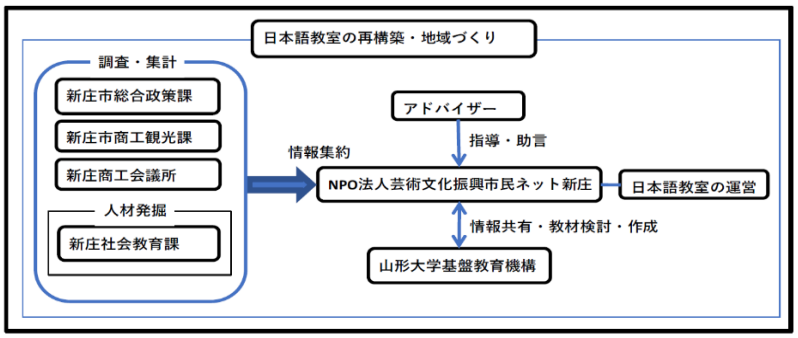
新庄市

１　地域日本語教室スタートアッププログラムの概要

（１）事業実施の背景

新庄市では令和３年５月末現在で 412 人の外国人が住んでおり、市の人口に対する割合は 1.2%となっている。決して多い数字ではないが、この中には、国籍や文化、宗教といった様々な価値観を持った人たちが混在している。年々、市内在住の外国人労働者が増加しており、平成 10 年ごろから新庄市民プラザで実施している既存の日本語教室では、それらの外国人のニーズへの対応が困難になってきていた。そのため、在住外国人が本格的に日本語を学ぶ場づくりや、在住外国人を社会に内包する受け皿をつくるという、地域づくりという観点から日本語教室の環境を再構築する必要があった。

そこで、新庄市民プラザの指定管理者である NPO 法人芸術文化振興市民ネット新庄では、文化庁の「生活者としての外国人」のための日本語教室空白地解消推進事業を活用して、事業費を確保し、図１のとおり新庄市の社会教育課・商工観光課・総合政策課や新庄商工会議所の地元組織に、文化庁から派遣されたアドバイザーを迎え、推進体制を確立した。



※図１　地域日本語教室スタートアッププログラムの実施体制

（２）事業のねらい

新庄市における日本語教室の再構築を軸に、関係機関の連携を図り、日本人の在住外国人対する意識調査の実施と学習支援ボランティア人材の掘り起しと育成を推進することで、在住外国人の受け皿づくりやサポート体制を構築する。また、在住外国人のニーズを反映した日本語教室を再構築することにより、外国人と日本人のコミュニケーション力の向上を目指し、外国人に優しいまちづくりへとつなげることを目的に３ヵ年の事業実施を想定している。

２　事業内容

（１）推進体制の構築

上記の図１にも記載したとおり、今までは、生涯学習・企業立地・観光振興などそれぞれの目的で外国人支援を行っていた部署や関係機関を、「日本語教室の再構築」という共通する目的を掲げることにより、包括的な検討体制の構築が可能となった。加えて、補助金を活用することにより、山形大学からコーディネーターやアドバイザーを招へいし、専門的な知見でのアドバイスをいただける体制を構築した。令和３年度は６月２１日にキックオフ会議を実施し、定期的にアドバイスをいただきながら事業を推進している。

（２）方向性と基礎データの整理

①推進会議におけるニーズ把握

上記で挙げた推進会議において、それぞれの関係機関の視点から、在住外国人の現状を話し合うことにより、ニーズを多面的に捉えることができ、支援すべき方向性が見えてきた。日本語教室として支援すべき方向性としては、実用的な日本語教室の開催が望まれていることをふまえて「既存の日本語教室を生かしつつ、より実用的で上級者向けの新たな日本語教室を立ち上げる」こととした。

②在住外国人のニーズ調査と外国人に対する意識調査の実施

推進会議では、上記の方針のもと、市民や在住外国人に対してアンケート調査を実施した。市民に対しては「外国人支援に関する意識調査」と称して、多文化共生社会に対しての意識や在住外国人が増えていることに対する意識のアンケート調査を、在住外国人には「外国人向け日本語能力アンケート調査」と称して、日本での生活における日本語の学習機会の需要や日本語を必要とするケース等を調査した。両方のアンケート調査を実施し、当初の予想を上回る件数の回答を得た。その調査結果については、現在、分析中である。

（3）ボランティア・サポーター養成講座（外国人とのよりよいコミュニケーション講座）

多文化共生社会において外国人と共生していくためのコミュニケーション力を身につけ、外国人にやさしいまちづくりの一歩目として、日本語ボランティアを育成・確保するために「外国人とのよりよいコミュニケーション講座」を開催し、在住外国人の日本語学習意欲に対応できるサポート体制の強化を図った。講座は表１のとおり開催し、16～72 歳の 19 名の参加があった。主にやさしい日本語や多文化への意識、考え方などを学んだ。

回数	日付	内容
1回目	9月5日(日)	日本人ってだれ?外国人ってだれ?
2回目	9月19日(日)	異文化コミュニケーション、どうすればいい?
3回目	10月3日(日)	日本語を外国語として見てみよう #1
4回目	10月31日(日)	日本語を外国語として見てみよう #2
5回目	11月7日(日)	新庄ってどんな町?-外国出身者から見る新庄とは-
6回目	11月21日(日)	多文化社会って何?
7回目	12月5日(日)	日本語支援プロジェクト #1
8回目	12月12日(日)	日本語支援プロジェクト #2

※表１　外国人とのより良いコミュニケーション講座内容

３　今後の展望

３ヵ年事業の１年目を終えて、次年度も多文化共生社会の実現のために、在住外国人へのサポート人材の確保と養成講座を継続して実施していく予定である。また、今年度実施したアンケート調査の分析結果をもとにした「新たな日本語教室」を試験的に実施し、併せて、連携体制の強化や市民と在住外国人の交流会の充実を図っていきたいと考えている。

４　成果（○）と課題（●）

○　サポーター養成講座の実施により、サポート人材の発掘につながったことは大きな成果である。これまで開催していた日本語教室では対応できなかったニーズに合わせた形での開催へと可能性が広がった。また、最上全域から参加があったことから、在住外国人に対する関心は、近隣の地域にもあることが伺える。今後も継続したキーパーソンとなる人材を増やしていきたい。

○　この事業により各関係機関との連携がとられるようになり、それぞれが把握していた情報を共有できたことで、課題解決に向けて分野を活かした様々な意見が取り入れられるようになった。連携体制の構築がいかに重要であるかを実感できた。また、サポーター養成講座等を共催した山形県国際交流協会をはじめ、県内で活動する国際交流団体とつながりができたことで、最上地域の枠を超え、同じ思いを持って活動している団体との情報交換が可能となったことは非常に有意義であった。

●　他地域との情報交換が可能となったことで、最上地域がいかに取り残されているか、施策の必要性をより強く感じた。アンケート調査の結果を受け、まずはお互いにコミュニケーションをとるためのきっかけとして、市の広報を活用した情報提供や交流会等の開催、新たな日本語教室や外国人に関わるワンストップ窓口の設置等の整備を行う必要がある。しかし、多文化共生社会は、どちらか一方の押し付けであってはならないことから、バランスのとれた関係を築くことを心掛けたい。また、様々な計画を実行するにあたり、サポート人材確保は不可欠であり、継続した講座等を行うことで、住民の多文化共生に対する理解を深める必要がある。文化や感覚の違いを理解し合うことは容易ではないが、丁寧に対応していくことで外国人にやさしいまちづくりへとつなげたい。

新庄地区ジュニア長距離練習会について

新庄市

１　はじめに

山形県では縦断駅伝競走大会や女子駅伝競走大会など､歴史ある大会が開催されている。

しかしながら、新庄地区の中学校には陸上競技部が無く、ジュニア選手の育成が長年の課題となっている。

今年度より地域おこし協力隊を迎え、新庄地区の陸上競技長距離種目におけるジュニア育成を図るため、６月に「新庄地区ジュニア長距離練習会」をスタートした。

競技力の向上を図ることはもちろんのこと、コミュニケーション能力を身に着け、将来（高校・大学）の成長に繋げることを目的としている。

２　事業内容

（１）日　程　毎週月曜日
（２）会　場　新庄市陸上競技場、最上中央公園
（３）指導者　奥山　智広（地域おこし協力隊)、清水　涼雅（スポーツ指導員）
（４）協　力　新庄・最上チーム所属選手
（５）対象者　小学生（５年生以上)、中学生

＜　実績　＞

	６月	７月	８月	９月	１０月	１１月
回　数	4	3	1	0	2	3
参加者（中学生）	１２	１２	3	0	4	4
参加者（小学生）	１６	１４	6	0	8	5

総回数：１３回、総参加者数：８４人

３　成果（○）と課題（●）

○　大会や記録会等で多くの参加者が自己ベストを更新しており、縦断駅伝競走大会や女子駅伝競走大会出場を目標にする生徒も現れた。

○　自宅でできるトレーニングの資料配布や参加者一人一人にアドバイスを行い、自主練習の質を高めることができた。

○　新庄市外からも多数の参加があり、コミュニケーション能力の向上に繋がった。

●　令和４年度以降、ジュニア駅伝競走大会が行われないことが決定し、練習の成果を発揮する機会が減少してしまった。

＜練習会の様子＞

△坂道ダッシュ

△リズム感覚を養うトレーニング

△筋力トレーニングの様子

△フォームづくりのトレーニング

４　終わりに

最上地区の各所からジュニアチームの設立や練習会を求める声があり、今年度より地域おこし協力隊の事業の一環として、新庄地区の児童生徒へ陸上競技長距離種目の指導を行うことができた。

練習会に参加した児童生徒の中には、山形県の駅伝競技における名門校の「酒田南高等学校」への進学や山形県縦断駅伝競走大会新庄・最上チームの練習会への参加希望者も出てきており、新庄地区の課題であったジュニア選手の育成に改善の兆しが見える結果となった。

今後も児童生徒への指導を継続的に行っていき、将来的には新庄・最上チーム所属選手を中心にジュニアの駅伝チームを発足し、県内外で活躍する選手の育成に努めていきたいと考えている。

公民館学習講座「歴史学講座」

金山町

１　はじめに

金山町の歴史や文化財に関連する事柄について、楽しく学んで見識を広げることを目的とし、公民館学習講座の一つ「歴史学講座」を毎年開催している。有識者に講話をしていただく座学と県内各地へ出向いての現地研修を基本とし、年に４回ほど開催している。

２　事業のねらい

・金山町の歴史や文化財に興味をもち、金山町の貴重な宝として大事にしていく気持ちを養う
・金山町の歴史や文化財を体験・体感し、深く学習する
・金山町の歴史等に関連のある場所に行き、現地の歴史等を学び、金山町の歴史的魅力を改めて考える

３　具体的な取組

①テーマを決める

多くの方々に知って欲しい金山町の歴史や文化財について、また、話題になっている事柄などを歴史学講座のテーマとする。

令和元年度歴史学講座（米沢市田沢地区）
田沢地区の草木塔を案内いただいた。

②内容を決める

現地研修：テーマについて学習するため、金山町内・山形県内の数カ所に出向き、現地の方の話を聞き、その地の歴史を体験する。

座　　学：テーマについての有識者を講師とし、講話をしていただく。

◎令和３年度　公民館学習講座「歴史学講座」

新型コロナウィルス感染拡大防止対策として、参加者を町民に限定し、町内だけで歴史学講座を開催した。

①テーマ「金山観音巡礼」

山形県内には、置賜三十三観音・最上三十三観音・庄内三十三観音があり、多くの方々にお参りされている。金山町内各所にも観音堂があり、それらの特徴や歴史を学び、心の拠り所となる観音様を見つけることを目的とする。

②現地研修

金山町内１２地区・全１７カ所に観音堂があり、１２地区を４つに分け、１回の講座で

２～４地区・３～６カ所の観音堂を訪れる。各地区の方に現地でお話していただきたかったが、平日の午前中に開催するということで、各地区の長老や区長、観音堂を管理している方に事前に話を伺い、当日代弁させてもらった。参加者は観音様をお参りし、堂がある周りの様子にも興味を示し、観音様の特徴や歴史について熱心に耳を傾けていた。

観音堂の前で話を聞く様子

観音堂内で拝んでいる様子

４　成果と課題

成果

・山形県内の有名な観音様はお参りしたことがあっても、金山町内の観音様は行ったことがないという参加者が多く、今回の歴史学講座で金山町内の観音様について知ってもらうことができた。

・観音様や神社のお祭りが各地区のお祭りとなることが多く、観音様のお祭りの様子を知ることで、各地区のお祭りの様子を知ることにもつながった。

・観音様の種類によってお祭り日が違ったり、ご利益が違ったりしてくる。観音様それぞれの特徴を聞いて、観音様の種類について学ぶことができた。

課題

・歴史学講座は平日に開催するため、参加者が定着してしまっている感がある。新しい参加者を獲得するため、多くの方々に興味を示してもらえる内容を考える必要がある。

・土曜･日曜の開催や、長期休みに参加してもらえるような小中学生向けの内容の歴史学講座も考えていきたい。

５　終わりに

山形県に住んでいて、また、金山町に住んでいて、まだ行ったことがない歴史的名所や見たことのない文化財がたくさんある。たくさんの方に少しでも多くの県内･町内の歴史的魅力を体験してもらうために、これからも企画していきたい。

31 地区モルック教室

金山町

1　はじめに

ここ数年、エンターテインメントの世界で耳にする機会が増えた「モルック」というフィンランド発祥のスポーツ。ボーリングのピンの如く並んだ 12 本の木製の標的に、400g ほどの木製の棒を投げ当て、50 点ちょうどを目指す対戦型のスポーツである。標的から 3.5m 離れた場所から下手投げで投げるルールなのだが、勝利要件の 50 点ちょうどというのがなかなかの曲者であったりする(1 点でもオーバーすると 25 点に戻される)。点の数え方にも二通りあり（倒れた本数が 1 本なら表示されている数字、複数本なら倒れた本数が得点となる)、ちょっとした足し算の能力が問われるので、多少頭を悩ませることもあるが、老若男女が同じ空間でワイワイガヤガヤと声を上げて盛り上がることが出来るユニバーサルなスポーツとして注目されている。

このような、手軽に誰もが楽しめるスポーツ「モルック」を町民がどれだけ受け入れてくれるのか、試さない訳にはいかずに多くの方に触れていただく機会を創出してみた。

2　事業のねらい

ねらいは、町民の交流の場を創出すること。健康増進に対しての気概を創出すること。

昨今の新型コロナ感染症により、町イベントのほとんどは縮小傾向を余儀なくされ、事を為すには三密を防ぐことが大前提となっている。加えて町の介護保険料高騰が話題となり、町民の予防医療への関心を引き寄せることが急務の課題となった。そのような時節、社会体育が貢献できることとしてモルックが選択された。地区コミュニティ単位で活動できるスポーツとして、多くの世代が身構えることなくカジュアルに取り組めるスポーツとしてのモルックである。

3　具体的な取り組み

町内にある 31 の行政区。それぞれの地区にある公民館を会場としてモルック教室を開催し、実際に住民の方々に体験してもらった。区長や老人クラブ会長といった方をキーマンに声がけし、春先から一年を通して各地区を巡った。高齢者がメインとなるときは、健康福祉課や社会福祉協議会と連携しながら、新型コロナ感染症対策や 100 歳体操などの啓発が行えた。夏には全 24 チームが参加する町内モルック大会を企画し、地区代表のチームが参加する仕組みも準備したところ、小学生や中学生、その保護者らも参加する中、モルック教室をきっかけに結成された地区代表チームも数チーム参加した。

4　成果と課題

ある地区では、年に数回、地区の集会でしか利用されない公民館で地域住民が参加してのスポーツイベントを行えた。「町のイベントがあれば参加したい」「町で道具を貸してくれるか」「チームを作って練習したい」等、様々な声が上がり、モルックという素材を提供することで、笑顔と盛り上がりの交流の場を創出することが出来た。やって終わりではなく、運動を継続するきっかけを提供できた点が大きい。

全町イベントに参加する事には難色を示す住民が一定数おり、地区単位での事業だからこそ参加できるという町民特性も見えてきた。週に一度は住民が集まる公民館、冬には閉ざされる公民館、稲作農家が多く繁忙期には交流の機会がなくなる地域。地区公民館を利用してのモルック教室は、地域ごとの色や個性を垣間見る機会ともなった。成果と同時に、各地区の課題としても見えてきた。

町内には 31 の地区があるわけなので、各地に足を運び細かに丁寧にフォローしていく作業は長期的に取り組む必要があるが、その繰り返しにより、地域で運動するのが当たり前の町へと変わっていける感触を得た。

5　終わりに

世界的な感染症の拡大で、大人数で集まってのイベントは憚れるようになり、リモート環境・デジタル化が一気に進んだ。少人数で分散して多発的に開催するイベントが当たり前に出来るよう、スポーツ現場を支える側にも追従するスキルが求められている。

大きな変化は田舎では好まれないが、ちょっとした変化を積み重ねていくことで、気付けば明るく前向きな地域、夢と希望を持つのが当たり前の町へと成長していけそうである。

放課後演奏ワークショップ
～　ふるさとの木で奏でるやさしい音色　～

最上町

１．はじめに

≪ 創作弦楽器（フィドル）≫

豊かな自然に恵まれた最上町では地域に誇りと愛着を持てる子どもを育成するために特色ある教育活動を実施している。品格ある新しい音楽文化の創造を目指した当町は、平成 21 年当時、間伐材の有効利用に着目し地元産創作弦楽器（森の楽器）を初めて製作。以来、指導者の泉谷貴彦氏（高知県）や町内社会人演奏団体「森の楽器の会」と連携し、主に小学生を対象にした楽器製作及び演奏ワークショップを十数年にわたり展開してきた。しかし、新学習指導要領の改訂に伴い、従来のように教育課程内でのワークショップ開催が困難となったことから、今年度については希望者のみを対象に地区公民館で平日放課後に開催する等、方針を大きく見直した。

２．事業のねらい

故郷の木の音色を仲間と奏でることで子どもたちの木に対する愛情を育み、地域愛醸成を促していく。また、学校統廃合が進んだことで平日放課後における子どもの居場所のあり様が大きく問われる中、音楽活動を通じた新たなコミュニティ形成を促し、子どもたちの新たな社会交流の場としての定着を目指すものである。

≪ 講師の泉谷貴彦氏 ≫

（１）参加者：小学生　12 名
（２）講　師：「木と音の会」代表　泉谷 貴彦 氏（高知県）
　　「森の楽器の会」の会員（最上町）
（３）場　所：大堀地区公民館並びに最上町中央公民館
（４）日　程：
　　5 月下旬～　参加者公募
　　6 月～7 月　放課後演奏ワークショップ（計 6 回）
　　8 月 2 日～　夏季演奏ワークショップ（計 5 回）
　　8 月 22 日　成果披露会

３．企画・実施の配慮事項

・従来のように授業数を確保することが困難となったため、公募による演奏体験型ワークショップとして複数会場で実施する方針に変更した。開催日は週 1 回程度とし、時間帯は平日放課後（15：30～16：30）。多くの参加希望者を募るため、会場は学童保育と同会場にする等、子どもだけでなく保護者にとっても送迎負担等が少なくなるよう配慮した。
・遊びも交えながら約 2 か月間で個々の演奏技術をゆっくり育てる。夏休み期間は会場を最上

町中央公民館に統一した合同練習に切替え、他校児童との交流が図られるよう企画した。

・子どもたちが安心して演奏できるよう「森の楽器の会」メンバーが個別サポートについたり、新庄北高等学校最上校生徒らとの演奏も交えたりすることで、より多様な世代間交流を促す。

４．具体的な取り組み

（１）新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、最終的には１会場のみでの開催に至った。参加を希望した小学生は全員低学年ということもあり、まずは楽器に慣れ親しんでもらうべく遊びを交えながら色々な楽器を触らせ、自身の楽器選びに充分に時間をかけた。

（２）パート練習では全てのグループに大人がつくことで子どもたちが不安なく演奏できるような環境づくりに配慮。高学年と比べれば演奏を形にするまで多くの時間を要するが、焦らず上達を見守りながら、状況に合わせたプログラム提供に努めた。

（３）成果披露会ではハープやフィドルの他、鉄琴や塩ビ管を加工したオリジナル楽器も登場し、関係者が見守る中で各グループが順番に音を奏でてみせた。緊張を感じさせない堂々とした演奏で、最後は「キラキラ星」を全体合奏で締めくくり大きな拍手を受けた。

≪ 放課後演奏ワークショップ ≫

≪ 各パートの練習風景 ≫

≪ 成果披露会での合奏 ≫

４．成果と課題

（１）教育課程外での開催ということで参加者を集められるかが課題だったが、学童保育利用者を中心に申込みが得られ、開催の在り方としては一定の成果があったものと捉えている。今回に限らず来年度もぜひ継続受講していただけるよう周知 PR を図る必要がある。残念ながら今回実現できなかった別会場開催分においても、新型コロナウイルス感染症が落ち着いて、参加者が得られるようになれば、他校児童との交流要素も生まれてくるため、本事業の意義をさらに深めるものになると期待する。

（２）泉谷氏が提供するプログラムはただ単に演奏技術を習得するだけではなく、発表会に向けた心構えや観客へより伝わるための表現方法等、音楽活動の本質に迫る実践的かつ多様な体験が得られるため、参加した子どもたちの精神的成長が図られた。

（３）対象者が「学年」で固定されず、希望さえあれば来年度以降も継続して受講できるところが従来の形態と異なっており、参加した児童との関わりを今後も維持できる点においては町としてもメリットであると考える。特色ある音楽文化活動として今後大いに発信していくための実施基盤形成に向け、子どもたちとの関係性もしっかりと育てつつ、音楽祭等も企画しながら町のさらなる交流人口拡大を図れればと考える。

高校生ボランティアサークル「つくし会」
～コロナ禍だからこその活動～

最上町

１．はじめに

令和３年度の高校生ボランティアサークルつくし会は１年生７名、２年生１名、３年生２名の計１０名で活動を行っている。毎年、町内のお祭りの手伝いや、高齢者、障害者施設への訪問、２４時間テレビの募金活動などを行ってきた。今年度は新型コロナウイルス感染症予防を行いながら２つの活動を行った。

２．活動の方針

つくし会は月１回の定例会で､今後どのような活動を行うのかを話し合っている｡また、次の活動の準備などを行っている。基本、高校生がやりたいことを中心に活動計画とその内容を決めている。

３．今年度の取り組み

①富沢地区公民館・大堀地区公民館清掃活動

今年度の最初の活動は地区公民館の清掃を実施した。理由としては、新型コロナウイルスの影響があっても、感染症対策を行いつつ、できることからやっていくという考えがあったからだ。富沢地区公民館の清掃には６名、大堀地区公民館の清掃には８名の参加があり､公民館を利用する人や地域住民の方々の為にも一生懸命に清掃活動を行った。このような活動を通して、人のため、他人のことを第一に考え、同じ目標に向かって一人ひとりが行動できるようになってほしい。

○富沢地区公民館清掃活動

○大堀地区公民館清掃活動

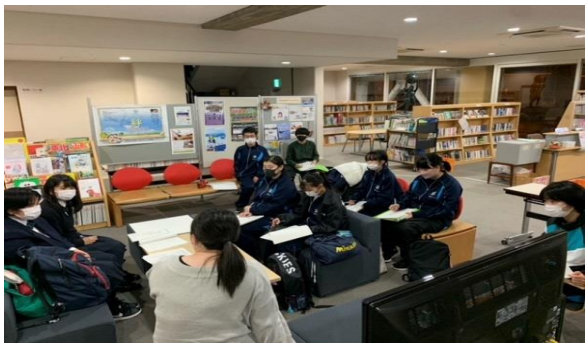
②クリスマスパーティ

令和３年１２月に町内幼児、小学生を対象にクリスマスパーティを実施した。ねらいとしては、手作りおもちゃを作りながら、分からないところは相談して考えながら完成させることで、質問力・コミュニケーション力等を養うことである。定例会ではどのようなブースを出すのか、誰が担当するのかなどを話し合い、プラバン、クリスマスカード作り、お菓子冷蔵庫（お菓子を入れる箱）の３つのブースを２名ずつで運営することになった。会場準備もすべてつくし会のメンバーのみで行った。参加してくれた幼児、小学生や保護者に積極的に話しかけていた姿が印象的だった。また、参加者の小学生な

ども分からない所があったら、自分から進んで高校生に聞いている姿も見られ嬉しかった。

実施効果としては、集団の中で学年関係なく遊ぶことによって、他人を思いやる気持ちが醸成され、多方面に興味関心を持ってもらえたのではないかと考える。また、遊びの主体が、インターネットやゲームになっている子どもたちに、この事業を通してモノづくりの楽しさ、奥深さを知ってもらえたのではないかと思う。

○定例会の様子



○クリスマス当日の様子：会場準備

○ブースの様子

4．成果（○）と課題（▲）

○コロナ禍ではあったが、感染症予防を行いながらでもできる活動を実施することができ、良かった。

○つくし会以外の方々（クリスマスパーティ参加者や町民）との交流ができた。

○少しずつではあるが、自分で考え、行動することができるようになった。

▲コロナ禍でもできるような活動を増やしていきたい。

▲子供との交流だけでなく、地域の大人との交流の場を作っていきたい。

▲自発的に行動する生徒が少なかったので､積極的な行動につながるよう促していく。

▲つくし会のメンバーが最上校の生徒のみになっているので、最上町在住の他の高校に通っている生徒の加入も呼びかけていく。

5．おわりに

つくし会のメンバーには、ボランティア活動を通して、他人のことも考えることができ、行動できる人になってほしい。そのためには、様々な方々との関わりや体験を行うことで、その力が養われるのではないかと考える。コロナ禍だからこそ、他人のことを思いやり、行動できるメンバーであってほしい。